

V. 公開講座「長崎原爆とその影響」

岸 川 正 大

長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センター（原爆資料センター）は設立より18年が経過した。この間に原爆資料センターの資料調査部では被爆手帳保有者の健康管理に関する資料の収集と解析をおこない、また病理部は被爆者を中心とした病理解剖に関する資料を、その臓器を含めて収集し病理組織学的に分析をおこなってきた。本年1990年は原爆投下より45年目にあたり、ひとつの節目として、今まで多くの被爆者および親族の方々の協力を得て可能となった研究成果を、今度は被爆者を含めた一般市民に還元し、「原爆被爆と被爆による病気」に関する科学的資料を公表することは非常に意義あるものと思われた。幸い長崎大学では大学教育開放運営委員会（教育開放委員会）を中心として毎年十数種の公開講座が開催されており、本年は我が原爆資料センターでも上の理由により、「長崎原爆とその影響」のタイトルのもとに公開講座を行った。

《事前準備》

各種公開講座の第一回目の実務代表者による打ち合わせが、教育開放委員会主催で開かれたのは1990年1月の末であった。我々の公開講座は全く初めての試みであるため、昨年までに行なわれた他の公開講座の情報を知ることが有益であった。今までの公開講座では受講者数が少ない傾向にあり、また運営予算が少ない事があげられた。

2月になり公開講座の企画書を作り、開催日を9月29日～10月27日の各土曜日午後とし、

担当講師は原爆資料センターのスタッフに加えて、医療技術短期大学の太田保之教授にも被爆者の高齢化に伴う精神的な観点から講師を依頼し、承諾してもらった。

丁度その頃、教育開放委員会より長崎大学公開講座叢書としての出版の話があり、講義の内容をまとめる意味でも絶好の機会であり執筆の申し込みをした。本としては第一部「現代の生命像」、第二部「長崎原爆とその影響」、第三部「大学教育開放の現状と課題」から成り、原爆資料センターが第二部を受け持つ事になった。公開講座は5日間だが「長崎原爆とその影響」の執筆は序文と6章から成る構成として、各執筆者に依頼をした。原稿提出期限は約1ヶ月で、各執筆者にとってはかなりの負担ではあったが、どうにか4月20日には脱稿にこぎつけた。原爆資料センターとしては全く初体験の「被爆関連の解説書」出版である。6月下旬にインクの香も新しい本を手にすることが出来た。

7月下旬には公開講座「長崎原爆とその影響」の募集要項も出来上り、市内の大きい病院、市役所、被爆者関連諸機関、電停、バスターミナル等、人々の目に付きそうな場所に掲示をした。募集人員は50名、締切は8月24日である。募集人員を大幅にうわまる事が考えられ、その場合は50名に達した時点で締め切ることとし、申し込みのハガキに到着順番を示すスタンプをおして受講申し込み者の一覧表を作成した。

8月25日、昨日で締め切った受講申し込み最後の番号は13番であった。過日の公開講座

実務担当者の打ち合わせの際に、受講者の人数集めに非常に苦労したとの話があったが、今回は長崎市民の目に付きそうな施設には殆ど全部掲示し、官民で構成されている平和団体の機関誌にも募集要項を同封した。これで多数の申し込み者は間違いないと確信していた。しかし大きな誤算であったので、とりあえず NBC 放送局の報道記者 S 氏に相談したら、各種マスコミ関係に資料を送れとのアドバイスを戴いた。早速 Y 新聞から取材があった。M 新聞、N 新聞はじめいくつかの報道機関に取りあげて戴いた。公開講座初日の 9 月 29 日、その午前中にも申し込みがあり、結局 67 名の申し込みとなった。

《公開講座開催》

9 月 29 日午後 3 時より第一回目の講義がスタートした。「長崎原爆の威力」と題してセンター長の奥村教授の講義が行なわれた。原爆の原理や爆風、放射線等について一般の人にも分かりやすいような講義が行なわれた。10 分程の質疑応答の時間が設けられたが、活発な質問が相次ぎ、予定を大幅に過ぎて第一日目を修了した。翌日の西日本新聞には当日の記事が紹介され、参加者の声が載っていた。長崎に仕事で来ているという 26 歳の女性は「長崎にいるからには原爆のことをきちんと勉強したいと思って参加した。原爆の威力がこんなにすごいと初めて知った。講義はわかりやすくとてもおもしろい」と話していたと載っていた。

第二回目は関根教授による「長崎原爆の急性期障害」の話が行なわれた。腸の粘膜脱落による血性の下痢と脱水・栄養吸収障害による急性期の死亡原因などが解説された。質問は今回も多く、熱傷に関して被爆者の方から「ピカッと光った瞬間からしばらく原爆の閃光

をみていた。皮膚はヤケドを負ったが眼球にはヤケドも何も受けなかった。どうしてでしょうか？」との質問が出た。答えを用意してないような質問も多数あって、まさに真剣勝負の質疑応答であった。

第三回目は「長崎原爆の後遺症、後障害(岸川)」、「長崎原爆と癌(井関助手)」のテーマで病理学的な話を中心に講座が持たれた。ケロイドの問題、胎内被爆児の小頭症、血液細胞に見られる染色体異常についての解説、白血病や甲状腺癌、胃癌や大腸癌の被爆者における特性等の説明がされた。被爆二世、三世への遺伝の問題や癌の発生に関する切実な質問が相次いだ。

第四回目の講義は調査部の三根助手により「原爆被爆者の健康管理」と題して行なわれた。被爆者検診から得られた膨大なデータを解析し、被爆者の疾患特性、死因、検診回数と寿命との関係が分かりやすく解説された。なおこの日は原爆資料センター内の見学が行なわれた。殆ど一般の人は見る事が出来ない調査部のコンピュータ室では、デモンストレーション用の画面を用いた被爆者の検診データと、実際の検診センターでの診察診断との関連性の紹介があった。

第五回目の最終回は医療短大の太田教授により「被爆者の高齢化と精神保健」の講義が行なわれた。60 才以上の一人暮らしの被爆者の生活実態を明らかにし、また老年期の精神保健に関与する要因などを分かりやすい言葉と例を引きながら説明がなされた。癌や他の日常的な疾患に比し殆ど馴染みが薄い精神科的な病気に関する講義に、参加者も熱心にメモを取りながら聞き入っていた。またこの日も前回に続いて 2 グループに分かれての原爆資料センター内見学が行なわれた。病理部で保管する病理解剖症例の臓器室や癌登録の顕微

鏡標本の資料室の公開が行なわれた。なおこの日は最終回なので、受講証書の伝達式と閉講式が行なわれた。全回出席者のみに学長名の受講修了証が送られたが、残りの方にはセンター長の名前での受講証書が手渡された。閉講式の後も数人の方々から熱心な質問がセンター長や太田先生によせられていた。

《公開講座の反響とその後》

企画の段階では反響があるものと確信していたにもかかわらず、いざ受講者の募集を行なってみると申し込み者が少なく、報道関係に助けられて受講者を得た非常に心配された公開講座の開催であった。しかし、開催してみると受講者の方々の反応は極めて強く、今まで何回もいろんな所で原爆症の話をした経験をもつ筆者も、これほど受講者が熱心であった会場はなかったように思う。熱心な質疑応答は次回に再度あらためて勉強してから答えをする等、講義を行なう側も大いに刺激になったし、説明の若干の訂正をしなければならぬほどの事もあった。また被爆者の方からは被爆当日の状況を説明して貰うこともあった。(代表的な質疑応答はこの後にまとめて別記した。)

反省と次回の参考までに自由無記名のアンケートをとった。主催者側として一番気になっていたのは、会場が人数に比し狭く机を

全員に出せない事であった。やはりアンケートにも「机が欲しかった」との記述が見られた。しかし受講者にはほぼ満足して貰えたようでホッとした。(アンケートの結果は別記した。)

公開講座が修了して1ヶ月の間にお礼の手紙とハガキを数人の方々から戴いた。コーヒー・ブレイクにはセンター長室を開放して、スナック類を用意したが、「細やかな心使いが心憎いほどでした」とのお褒めの言葉を戴き、主催者の一人として非常に嬉しかった。御本人の了解を得て、一通の手紙を本稿の最後に紹介した。

被爆後、東京で暮らしていたが最近故郷の長崎へ帰ってこられたという御婦人は、医学の発展に少しでも役立てばと、最終日に解剖への献体の申し込みをして帰られた。一番遠くからの受講者は、たまたま諫早の知り合いの所へ遊びに来ていて、この公開講座を知り参加されたという岐阜県の御婦人であった。また島原市、佐世保市からの受講者もあり、その方からも丁寧なお礼状を頂戴した。

被爆者のSさんは、公開講座の途中で入院しなければならなくなった。残りの講義を聞きたいとの希望が強く、録音テープを貰いたい旨の申し入れがあったので送らせていただいた。